

0. はじめに

現在、日本聖書協会は新共同訳聖書の後継となる翻訳を準備しており、2018年12月に出版の予定です。よく知られているように、日本聖書協会ではほぼ30年毎に改訳を行っています。今回は1987年出版の新共同訳、その前は1955年の口語訳、さらにさかのぼりますと、第二次世界大戦を挟む1917年の大正訳、そして出発点となるのが1887年の明治元訳です。それぞれの時代にふさわしい言表をもって、キリスト者はもちろん、キリスト者でない人にも、人類共有の財産と言ってよい大切なメッセージを届け、心を耕し、新鮮な空気を吹き入れてきました。わたしは2010年からこの翻訳事業に携わっています。ささやかな働きに過ぎないのですが、それでも7年、8年と時間を重ね、聖書との新たな出会いがあり、発見がありました。

本日はこの『聖書協会共同訳』翻訳事業の経過と、わたしが小さな体験を通して学んできたことを分かち合うことができればと思います。合わせて、先達の気概を引き継ぎ、次世代にも伝えられたらと願っております。最初に翻訳の歴史を瞥見し、今回の翻訳事業がどのように位置づけられるか、したがってどのような特徴をもつかをお話しします。続いて、この作業を通して検討されたことを単語のレベルから紹介します。さらに近年の聖書学における方法論の認識——一般的に共時的な研究といわれる方法論を反映させた箇所や新たな解釈から生まれた訳文を紹介してまいります。

1. 聖書翻訳の歴史

1) 概観

最初に聖書翻訳の歴史を辿り、聖書協会の新翻訳事業の位置や特徴について述べたく思います。研究史を振り返りますと、総論として、聖書の翻訳は長く直訳・逐語訳でなされてきましたが、20世紀の半ばに意識が台頭してきました。しかし近年は直訳方式の欠落点を脚注で補う方式が一般化していると申せます。今回の翻訳も、その方式の一つと位置づけられます。

ルター以降の翻訳を瞥見しましょう。2017年は近代聖書翻訳の出発点となったマルティン・ルターの記念の年であり、改めて彼の仕事が脚光を浴びました。聖書を日常語で読むよう働きかけたことは、信仰の歴史においてはもちろん、文化史的にも疑いなく彼の最重

要業績の一つに数えられるでしょう。

彼の翻訳手法は後代「形式的対応」(formal correspondence)と呼ばれるスタイルでした。原語(ヘブライ語、ギリシア語)の同一の単語に同一の訳語を当てることを基本とする方式で、七十人訳を含め、聖書翻訳の歴史において20世紀半ばに至るまでの主流であったと申せます。口語訳に親しんだ世代にはなじみ深い翻訳法です。簡単に言えば直訳ということですが、いま「20世紀半ば」と申しましたが、具体的には英語圏の *the Revised Standard Version* (RSV) や口語訳がそれにあたります。これらは「形式的対応」でありつつ、できる限りその時代の言葉に近い表現を心がけた、この方式による翻訳の最高峰と評することができます。

2) 直訳の限界

他方、1960年代から新たな立場が台頭してまいります。従来の直訳方式と対照させるならば、意識と性格づけられます。わたしどもは聖書が執筆された時代から2000年も2500年も隔たった社会に暮らしているのですから、当然に文化の翻訳も必要となります。言語文化論とも呼ばれ、多くの人が考え方を整理させられました。そうして、直訳が必ずしも適切とはいえないとの認識に至ります。たとえば挨拶の言葉でも、「平和」を意味するシャロームと、その日の天候に気を配る「こんにちは」を、社会的な緊張感から見て、同列に扱うことに何の問題も覚えないとすれば、鈍感と言われてしまうかもしれません。

よく引き合いに出される例がマルコ9章49節です。この箇所は口語訳で、「人はすべて火で塩づけられねばならない」と訳されています。「塩づけられる」と訳された語は「塩」という名詞(ハラス)を直説法受動態(ハリストーセタイ)にしたものです。この用例は他にマタイ5章13節「あなたがたは地の塩である。もし塩のききめがなくなったら、何によってその味を取りもどされようか」だけ。ここでは、「味を取りもどす」と訳しています(新翻訳「塩味が付けられよう」)。マタイの方はともかく、マルコの「火で塩づける」あるいは「火で塩味を付ける」は日本語ではあり得ない表現です。「火」に対応する動詞は単純に考えれば「焼く」とか「燃やす」です。しかし直訳ということであるとしか訳せません。英訳も *Everyone will be salted with fire.* (KJV 1611, RSV 1952, NRSV 1989, English Standard Version, 2007 など) と、そのままギリシア語を英語に置き換えています。「形式的対応」の典型的な翻訳スタイルと申せます。

塩には「味付け」「防腐」そして「浄め」の役割がありました。このテキストは、神の

裁きの象徴である「火」をもって「浄める」あるいは「処罰する」といった意味合いなの
でしょうが、直訳では「火で塩づけする」となってしまう。そこで、極端な意識を心がけ
るリビングバイブル（日本語版 1978, 2011）は「すべてのものは、火のような試練によっ
て塩けをつけられるのです」としている。これは「敷衍訳」と呼ぶべきカテゴリーで、聖
書をもとにした読み物と考えた方がよいもので、少々乱暴に感想を述べれば、元来、正確
な翻訳を目指したものではありません。文化の翻訳を試みたという点では評価されるべき
でしょうが、「火のような試練」は原意を損なっていると言わねばなりません。

その他、マタイ5章3節の有名な「心の貧しい人は幸いである」という箇所を考えたく思
います。*New English Bible*（新約 1961、旧約 1970）は、**How blest are those who know
that they are poor,**（自分が貧しいと知っている人たちは、何と祝されていることか）、
先ほどのリビングバイブルは、「心の貧しさを知る謙遜な人は幸いです」と訳しています。
この「貧しさ」は、「へりくだり」ということばかりではないと思います。

それはともかく、このように1960年代から1970年代にかけて、意識の方針による聖書が
相次いで出版されました。時代の隔たりによる分かりにくさという従来の欠落点を補って、
一定の役割を果たしたと申せます。とはいえ、決して決定版の翻訳とは言えません。そこ
で学術的な裏づけもある翻訳が望まれました。また1960年代の第二バチカン公会議以降の
聖書翻訳の奨励、あるいはエキュメニズムの進展もあって、その気運は高まりました。こ
れが1978年出版の日本聖書協会『共同訳聖書』（新翻訳と区別するため、このように表記
します）の背景です。

共同訳聖書ではいわゆる「動的等価性」（dynamic equivalence）の理論が採用されま
した。これは米国の言語学者で牧師でもあったユージン・アルバート・ナイダ（1914-2011）
が提唱した方式です。彼は、聖書翻訳にあたって原文との間に認められる同質性、あるい
は機能的な等価性を重視するよう主張しました。この翻訳は現在は講談社学術文庫で堀田
雄康先生の注釈付で読むことができます。この書の「序言」を読むと、教会での使用を第
一の目的とせず、「従来の聖書」（ということは口語訳）に代わるものではないと明記さ
れているので、一つのトライアル、研究史の一ページとして、かつカトリックとプロテス
タントの共同事業として有意義な翻訳であったと位置づけられます。ただ「イエス」や
「パウロス」「ルカス」といった人名や地名の原音表記の馴染みにくさ、意識ということ
では翻訳者の主観が入りすぎる点など不評を買い、読み続けられる書とはなりません
でした。わたしが教会の現場に出たのは1980年代初頭のことですが、説教では必ず共同訳聖書

に言及するよう心がけたものでした。けれども、たいていは批判的に引用しておりました。先ほど例にあげた山上の説教冒頭は、共同訳聖書では「ただ神により頼む人々は、幸いだ」と訳されています。「心の貧しい人」をこのようにイメージする人は当該箇所訳の翻訳者以外にもいたかもしれませんが、意味の広がりや狭める、少々貧しい訳と感じ、妥当な訳文とは思えませんでした。それは意識全般にもあてはまることです。

この試みが、しかしながら『新共同訳』を誘引することとなりました。新共同訳はナイダ理論と一線を画し、直訳に変更しました。とはいえ、共同訳に携わった人もいたからでしょうか、このシフトはスムーズにいかなかったようです。新共同訳で重要な役割を担われた和田幹男先生によれば、この共同訳から新共同訳に移行するプロセスで、動的等価性や「大衆が分かる日本語」にこだわる人がいたこと、あるいは、それに対する受け止めが翻訳者間で異なっていたこと、これらのため、かなりの混乱を招いたと述べておられます。

例えばヨブ記1:21のヨブによる有名な告白「わたしは裸で母の胎を出た。／裸でそこに帰ろう。／主は与え、主は奪う。／主の御名はほめたたえられよ。」（新共同訳）です。これは、草稿段階では次のように訳されていたということです。

何一つ持たずに生まれたのだ。

何一つ持たずに死のう。

主はお与えになり、またお取りになる。

主の御名をほめたたえよう

和田氏は、これが動的等価訳についてよく考えられた訳だと評価される一方で、次のような批判も加えます。確かに「裸で」は「何一つ持たない」、「母の胎を出る」は「生まれる」ことであり、「原文と翻訳される言語との間に存する同質性」に配慮した訳だと言えるかもしれないが、狭い文脈では妥当でも、聖書全体の広がりや狭まりを考えると、問題を抱える。たとえば、「裸」は、「裸であったが、恥ずかしがりはしなかった」状態にあるアダムとエバの無垢な様子を想起させ、「母の胎」を軸とすると、イザヤ(49:1)やエレミヤ(1:5)への連想が生まれる。同質性に比重を置いた訳を施すことで、これらとのつながりが断ち切られることになる（『理想』1984.12, p.184）。つまり方針に基づいた訳で、誤りではないが、聖書全体を俯瞰できる訳とはならないとおっしゃるのです。

わたしが考えますところ、この失敗は動的等価法という訳論を機械的に適用したこ

とに起因します。翻訳は、すべてのテキストを同じ理論や方法によってなさねばならない、と考えてしまったことです。もちろん、これは長年にわたって継承されてきた一つの理解です。一方、テキストにはそれぞれの意図が込められています。どのテキストもが創造伝承や預言者との連関性を意識しているわけではありません。反対に、民族最初期の歴史物語には、意識すべき前提などはなかったかもしれませんから、分かりやすく「機能的な等価性」を与えた訳が、読者に親切かなと思えます。しかし後代の文書となるほど、前提が増えていきます。当然のことながら、訳者はテキストの特性を考え、適切な状況判断を求められる。理論のロボットとなつてはならない、ということです。言われたとおりの方針で、動的等価訳で翻訳を行えば、非難はされないかもしれませんが、ふさわしい作業とはなりません。このあたりに、小さな文脈での整合性を重視する意識もしくは動的等価訳の留意点が潜んでいるということではないでしょうか。

3) 聖書協会共同訳とスコ-pos理論

そこで今回の翻訳の良質な点ということになります。新翻訳事業では基本方針として、「スコ-pos理論」を採用しました。スコ-posとはギリシア語で目的、目標、役割といった意味合いで、新約聖書では、パウロがフィリピの信徒への手紙3章14節において「目標（スコ-pos）を目指して走る」が唯一の用例です。この理論は、長く宣教師を務め、後にオランダ・アムステルダム自由大学神学部教授となったローレンス・デ・フリスによって立てられました。これは「形式的対応」や「動的等価」を否定する第三の法則といった、堅固な方法論ではない、と申します。わたしなりに言い換えると、聖書の66文書における1,365章、37,000節を、それぞれの個性に応じた方法で、さらに言えばそれぞれの文脈にふさわしい仕方での翻訳、と。「中央集権ではない地方分権」に喩えてもよいかもしれません。そのためには原語、原文、置かれた文脈が生きる訳文が望まれます。

すでに報告されているところでありますが、今回の翻訳事業では、18の教派や団体による諮問会議が2009年10月6日に「翻訳方針前文」を採択し、これが12月4日の理事会決議でオーソライズされました。わたしなりに乱暴に要約しますと、次のようになります。①すべての教会が使用することを目指す、②礼拝で用いる、③常用漢字表に準拠する等、義務教育終了者の日本語力を基準とする、④言語や文化の変化に対応し、その将来にわたる日本語・日本文化の形成に貢献できることを目指す、⑤聖書学、翻訳学など学的な成果に基づき、原典に忠実な翻訳を目指す。そのため最新の校訂本を使用する、⑥聖書全体の統

一性を保つ。従来の協会訳を参考にして適切な訳語を得る、⑦異読や地理や文化的背景を説明する注、引照聖句、小見出し、巻末解説、地図や年表等、本文以外にも考え、読者のニーズに応ずる努力をなす。

この方針に参加した18の教派や団体は、日本のキリスト者人口の四分の三以上にあたるということです。学校の勤務者として付言すると、わが国のプロテスタント学校の多くが加盟するキリスト教学校教育同盟には、百を超える学校法人、78の大学・短大を始め、専門学校、小中高の計276校に、学生・生徒・児童が34万5千人が学んでいます。日本カトリック学校連合会にも34大学・短大を始め、小中高を合わせ260校。生徒・学生数など詳細は存じ上げませんが、プロテスタントとそれほど変わらないと思います。その大半が新共同訳聖書を使っており、数年の内に新翻訳に移行することが期待されます。これらの学校に連なる生徒・学生の大半はキリスト者ではありませんから、合わせて70万に近い人、したがって、この聖書を手取る人は日本のキリスト者総数に7割ほど加算された数字ということになります。

翻訳の実務については、まず原語担当者が一定量翻訳をすると、それを日本語担当者がチェックする。わたしは詩書を担当しました。比較的早い時期にまとまった量を翻訳して提出しましたが、日本語担当者と一部の訳文について話し合い、意見を聞き入れるうちに、結局、全体を訳し直すことになってしまいました。

日本語担当の先生と向かい合ってチェック作業をすると、一日に数節ほどしか進みません。かなり慎重な作業でした。こうして原語担当者と日本語担当者が互いにチェックしながら翻訳作業を進めました。ここが個人訳と委員会訳との大きな違いです。一人の思いこみによる訳文は避けられるということです。原語担当者は聖書学専攻の人があたりますが、日本語担当者は、歌人、詩人、日本文学の研究者、日本語学者などで、非常に厳しい日本語観をおもちの方々でした。数年かかって分担分の最後まで翻訳した原稿を、その翻訳に関わらなかった原語・日本語担当者が独自の視点からチェックし、そのチェックをもとに最初の担当者と話し合って、その段階の原稿を完成させていきます。

こうして聖書各書の翻訳作業が進行してまいります。さらに全体の訳語をチェックする編集委員会が定期的開催され、議論の多い言葉について調整を行い、その原稿を朗読チェックにかけます。この段階では、聞いて分かるか、熟語や漢語、同音異義語が識別できるかなどの検討を経て、訳文の意図とは別のことがイメージされてしまいかねないテキストをあぶりだしていく。その後、編集委員会や外部モニター、パイロット版の読者によ

る提言を受けます。この間、編集委員会で検討を行って、①文語表現、②敬語表現、③接続詞の取り扱い、④いろいろな書に点在する引用なども含め、各種訳語の統一を図ることを申し合わせました。聖書の伝統として、神の固有名詞である神聖四文字（通例「ヤハウエ」と読むと考える）については、議論はありましたが「わが主」と訳すこととしまして、一般的な「主」（アドーナイ）と区別することとしました。

このようにして改訂を重ね、本文を確定してまいります。個人訳とは異なる、多層的なプロセスを経て、原典に忠実でありつつ、よりよい日本語の聖書が生み出されます。個人的には、かなりの思い入れをもって提案した訳文が覆され、いまでも残念な気持ちでいる箇所もございますが、それは自分の論文に記すことといたしました。

2. 単語の検討から

1) 研究の進展や日本語の変化による昆虫、宝石、祭儀などの名称の厳密化

最初に紹介したいのは、研究の進展や日本語の変化によって、昆虫や宝石、祭儀などの名称が厳密化されてきているということです。実は新共同訳では少々ぶれがありました。ここで具体例を多く紹介することはできませんが、例えば従来「いなご」と訳されてきた語（アルベ）は、平仮名で「ばった」と訳されることになりました。訳語検討に際して初めて知ったのですが、聖書協会には以前から早く修正するようにとの意見が寄せられていたそうです。かつて日本の文脈では「いなご」が「ばった」も含む総称と考えられたこともあったようですが、近年は区別して用いられているということです。少し細かい話になりますが、日本ではいなごが食物にもなり、この名称はよく浸透しています。しかし中東地域で大量発生して穀物に被害をもたらすのはばったの種類（サバクトビバッタ、トノサマバッタ）で、いなごではない。またその地域でいなごを食べる習慣はなく、もっぱらばったを食べるそうです。この語がまとまって用いられる出エジプト記10章、アモス書7章、ナホム書3章などを声を出して読んでみますと、少し異なる響きを感じられるかもしれません。

それから、やはり、わたしがまったく知見のなかったところで、「酵母」についても述べておきたい思います。口語聖書では「種を入れぬ（た）パン」と訳された箇所が、新共同訳で「酵母を入れぬ（た）パン」と訳されました（出12:18-20, 23:15,18など）。しかし「酵母」は紀元19世紀以降に存在が認識された菌類の総称で、紀元前の中東社会で使わ

れることのない単語です。もちろん動的等価訳ということなのかもしれませんが、時代考証の観点から問題があるとして、「種なし（入り）パン」を用いることとなりました。

他にも宝石、動植物の名称、祭儀用語、軍事兵器、構築物などについて、慣用的に使われていたものも含め、考古学的な検証に耐えられる訳文を心がけました。

2) 人間の重さ

人間の重みに対する考えとして、「はしため」にも言い及んでおきます。これは口語訳の旧約では47回（新約を含めて48回）、新共同訳では32回（同35回）使われていました。聖書になじんだ人には耳慣れていて、それほど違和感がなかったかもしれません。文語訳では「婢女」（Lk.1:38）と訳されました。手元の『古語辞典』（旺文社）では「端女」と書き、数に入らない、人として扱われない状態にある人を指します。新共同訳では、何か特定の語（アーマー、シフハー）の訳語ということではなく、文脈の中で自由に使ったようです。歴史的には、その女性が一人の人間と見られない、望ましくない状況にあったということでしょう。

現代に聖書を読む者として、それを看過、容認することはできません。新たな方向を目指そうと議論し、「仕え女」とすることとしました。テキストによっては「男奴隸」に対する「女奴隸」（特に歴史文書）も考える必要が出てくると思われます。宮廷用語としては「仕え女」や「女奴隸」がふさわしくないケースも想定されますので、「女の召し使い」といった類語も考案されています。いずれにせよ、「はしため」は使わないことにしました。

また二人称の人称代名詞について、新共同訳では「お前」という言い方が頻出し、それなりに批判を受けておりました。新翻訳では、少なくとも、神がその言葉を使うことはないうよう申し合わせました。常に相手に敬意をもって向かい合う方と性格づけるということです。例外となるのは、創世記3章ぐらいです。ここは蛇を詰問、叱責する場面です。このようなシーンでは怒りを表すために許容される言い回しだと考えます。

対照的に、出エジプト記のファラオは、1章の助産婦や5章のモーセとアロンに向かって「お前」と言います。その他、サムエル記上17章のゴリアト、24章のダビデに語るサウル、列王記下18章のラブ・シャケ、ダニエル書2章以下のネブカドネツアルなど、少しバイアスがかかっている嫌いもありますが、あまり好意的に扱われていない人物の口からは発せ

られています。他方、主要な登場者は口にしません。詩編においても、新共同訳では31箇所「お前」が使われましたが、今回は、欺きの魂や敵対者に語る場面に限り数カ所(116:7, 120:3, 137:8-9)にとどまります。よく知られている詩編137編8-9節を例にあげます。

娘バビロンよ、破壊者よ
いかに幸いなことか
お前がわたしたちにした仕打ちを お前に仕返す者
お前の幼子を捕えて岩にたたきつける者は。(新共同訳)

このテキストそのものが礼拝にふさわしいかどうか、意見のある人はいらっしやるでしょうが、それはともかくも、ここに「あなた」を用いては、作者の感情がストレートに響かせようがありません。直前の5-6節ではエルサレムへの憧憬の思いを同じ二人称単数で述べています。

エルサレムよ
もしも、わたしがあなたを忘れるなら わたしの右手はなえるがよい。
わたしの舌は上顎にはり付くがよい
もしも、あなたを思わぬときがあるなら
もしも、エルサレムを わたしの最大の喜びとしないなら。(新共同訳)

原語は同じですが、ここは「あなた」と訳されています。このようなコントラストは日本語への翻訳には当然必要であると考えます。

3) 説明的すぎる語の解消

その他、新共同訳で「説明的すぎる」と批判的な評価を受けた敵対者の語彙「(神に)逆らう者」「(神に)従う者」「恵みの御業」「(神の)慈しみに生きる者」についても触れておきたく存じます。これらは口語訳ではたいていの場合、それぞれ「悪しき者」「正しい者」「義／正義」「聖徒」と訳され、文脈によるずれもほとんどありませんでした。今回は口語訳に近い訳となる予定です。

上にあげた語は動的等価訳の名残なのだと思います。「逆らう者」の原語はラーシャです。これは「悪」に関わる語で、「逆らう」の意味を排除するものではありませんが、「神に」まで入ると訳しすぎという気がします。この語は詩編では、作者が、信仰者を装いつつ、心の底で神に背を向けていると判断した人たちを指します。とはいえ、この人々は形式的には祭儀を守り、律法を遵守していたようですので、「逆らう」という訳語がそのまま当てはまるとは思えません。

「主の慈しみに生きる者」も見ておきたいです。原語はハシードで、これは「慈しみ」を意味するヘセドの派生語です。基幹となる「慈しみ」が入っている点は評価されてよいですが、「生きる」は読み込みです。この訳語をめぐる新共同訳の大きな問題は、単複の混在でした。「主の慈しみに生きる者」「……人」「……人々」が原語の単複とは無関係に、無秩序に記されているとの印象を受けます。それは同一作品内（詩132:9, 16）にも、また隣接作品間（30:5, 31:24）にも見られました。単複の区別は元来の日本語に存在しないと反論もあるかもしれませんが、少なくとも現代に別の文化領域の文献を翻訳するというならば、この問題を避けて通ることはできません。新翻訳では「忠実な人」という訳語が考えられています。

3. 近年の研究成果から

20世紀の後半以降、聖書の研究は、歴史的研究と文芸学的研究とを両輪として展開しています。平板化して言えば、前者は聖書がどのような経過の中で成立したかを、後者は聖書がどのようにメッセージを表現し、意味単位を構築しているかを問います。

歴史的な研究では、聖書のテキストを小さな単位に区切り、そのまとまりにおける整合性を考えました。しかし近年は聖書がより大きな編集体として構想されていることに着目しています。翻訳もそれを意識したものであることが望ましいと考えます。

聖書は一度読んで終わりという書物ではありません。読み手は繰り返し読むことにより、メッセージを自らの一部としていきます。それゆえ、小さな段落や辞書的な意味ではなく、大きな文脈から意味を受け止めていく立場が重視されます。先行する言い回しが、後続の言表に影響を与えます。テキスト全体から解釈するという立場です。これも機械的に適用するのではなく、テキストの特性を確かめながら運用されることが求められます。

1) 物語の枠（インクルージオ＝囲い込みの構造）

聖書テキストは基本的に記憶し、暗唱していたと言われます。同一フレーズが単元や段落の区分のために用いられることは珍しくありません。これが文学単位としての枠を形成します。直訳で翻訳作業が行われている間は無自覚的であっても問題は起きませんでした。新共同訳ではかなりの乱れが目立ちました。今回はその多くが是正され、文学的にも整ったと言えます。

ヨブ記の場合、大きくは散文で書かれた1-2章および42章7-17節の物語部分（外枠）と、詩文によるそれ以外の部分に大別されます。しかしどちらの部分にも、執筆者は文学的な仕掛けを施し、読者に自ら読み、考える、主体的な参加を促しています。

ヨブ記1-2章はヨブ記のプロローグで、ウツの地に住むヨブの紹介を行っています。この人は信仰深く、多くの財産をもち、子どもにも恵まれ、神の祝福を受ける典型ともいえる生活を送っていた、と。新共同訳はヨブが「東の国一番の富豪であった」（ヨブ1:3）と伝えます。この「富豪」にあたる箇所には、ガドール（大きい）というヘブライ語が書かれています。そしてプロローグの主要部で、ヨブは主の命を受けたサタンからさまざまな災難を受けます。病気になり、町の外に隔離されます。新共同訳によれば、遠方から訪ねてきた三人の友人は、ヨブの「激しい苦痛」を見て、言葉を失ったといいます（2:13）。

原文を見ると、この箇所の「激しい」にもガドールの同根語が使われています。文語訳も口語訳も、ここは二つのガドールを同じ語で訳していました。文語訳では「此人は東の人の中にて最も大なる者なり……彼の苦悩の甚だ大なるを見ればなり」。口語訳では「東の人々のうちで最も大いなる者であった……彼の苦しみの非常に大きいのを見た」。ヨブ記の著者によれば、ヨブの偉大さ（ガドール）は経済的な面に限定されていません。精神的にも、信仰的にも、倫理的にも「大いなる者」でした。その人が「大いなる苦痛を受けた」。不思議なことに、対話編でもエピローグでも、この書はこの後、ヨブについてガドールという語を用いなくなります。「大きさ」にこだわる者ではなくなった、と言おうとしているかに思えます。

今回の翻訳では、ヨブ記のテキスト上の枠には一定程度こだわり、先ほどの箇所にも同じ言葉をあてています。「東の人々の中で最も大いなる人であった……彼の苦痛が甚だしく大きいのを見た」。ヨブの「大きさ」はこの程度の話だ、人が偉大であるといっても、ここまでのことであると、人の神格化を避けるのです。

もう一つ、ヨブ記1:1「ヨブは完全だった（ターム）」にも言い及んでおきたい思います。

ここは口語訳は「全く」、新共同訳では「無垢な人」と訳されていましたが、ヨブの語りの最後である31:40には別の活用ですけれども、同じ単語（タムムー）が使われています。口語訳は「ヨブの言葉は終わった」、新共同訳では「ヨブは語り尽くした」と訳されています。やむを得ないことですが、欧米の言語でも、この二つのテキストを関係づける翻訳は見あたりません。しかしヨブ記の執筆者にとっては意識した用法だったと思われます。人の思い至る「完全」は尽きてしまうもの、そこまでのものだという論評が聞こえてきそうです。

これまでの翻訳は、こういったテキスト上の枠を生かし切ることができていませんでした。新翻訳では「彼の言葉は完結した」。「完」の字が一緒なだけで、大げさに言い立てるなどご批判をいただきそうですが、皮一枚に過ぎないかもしれませんけれど、細かいところにも配慮しているということです。

その他、ヨブ記4章のエリファズの発言も見ておきたいです。エリファズはヨブ記には、かなり意地悪な老人として登場します。導入部冒頭の言葉である4:2は、新共同訳で、「あえてひとこと言ってみよう。あなたを疲れさせるだろうが、誰がものをいわずにいられようか」、そして導入部の締め括りとなる4:5は、「あなたの上に何事かふりかかると、あなたは弱ってしまう」。この箇所では「疲れさせる」と「弱ってしまう」には同じ言葉——「耐える」と訳すとよい言葉が使われています。ですからここでエリファズは、「あなたは耐えられるだろうか……耐えられないよな」と語っていることになり、その意地悪な性格がにじみ出た、執筆者の意図的な用語法が見られます。このような小さな所にも注意が払われています。

2) 詩編の文脈——詩編8編を例に

従来詩編は、一つ一つが独立した作品と考えられてきました。しかし20世紀半ばに死海文書が発見されたことで新たな認識が広がっています。死海文書には前2世紀から紀元1世紀の詩编写本が含まれています。旧約聖書の詩編の書は150の宗教詩からなる文書です。これを死海文書の詩编写本と比較すると、各作品の本文はほとんど同じですが、配列が異なる点が注目を集めました。例えば、101編から102編、103編に続いて109編、次に118編が書かれているという具合です。研究者の命名による第11洞窟で発見された詩编写本は、紀元前2世紀中頃のもので、詩編の書は当時はそのような配列順であったと推測されました。わたしたちが手にしている旧約聖書の詩編の書は、その後、現在のようなスタイ

ルに整えられたと考えられたのです。そこから、これまでアトランダムな蒐集体と考えられていた詩編の書が、かなり意図的な配列を施した連作的な編集体であるとの認識が生まれました。近年では、この観点から意味を発見する試みが続けられています。

この前提から詩編8編を考えたく思います。詩編8:3は、口語訳と新共同訳で正反対の訳語になっていました。

口語訳 あなたは敵と恨みを晴らす者とを静めるため
あだに備えて、とりでを設けられました。

新共同訳 あなたは刃向かう者に向かって砦を築き
報復する敵を絶ち滅ぼされます。

敵を「静める」（落ち着かせる）か、それとも「絶ち滅ぼす」か、ずいぶんと読み手を悩ませる訳語です。原語からの議論をしますと、どちらの訳も誤りではないと申せます。この箇所は「止める」という意味の動詞の使役形が置かれています。反抗を止めさせる、つまり「静める」とも、存在そのものを止めさせる、つまり「なくす」（＝絶ち滅ぼす）とも解せます。実際にこれまで西欧での翻訳にも双方が見られました。

新たな立場から考えると、詩編8編の先行作品として文脈を形成する詩編3-7編が敵対者に言及し（3:2, 4:2-3, 5:9c-10, 6:9, 7:15-16a）、その絶滅を願っていること（3:8, 5:5-7, 6:11, 7:10-17）がヒントを提供します。詩編の作者にとって、生活の現実には敵への怒りに満ちていました。そのまま考えれば、詩編8編も「絶ち滅ぼす」がふさわしいと感じられます。しかし詩編8:3は（上には訳語を示しませんでした）、神が、それら敵対者とは対照的に、幼子や乳飲み子という非闘争的な存在によって賛美を受けると述べています。そこから、神がこの世界にわれわれ人間とは異なる観点から向かい合っているというメッセージを読み取れます。発想の逆転が提示されているのです。そこで翻訳では「鎮める」を採用することとしました。

3) 出エジプト記 3:14 (エヘイエ・アシェル・エヘイエ)

最後に、将来この新翻訳を代表する訳文となる可能性のある出エジプト記のテキストに

触れておきたいと思います。これはモーセがホレブ山のふもとで神と対面し、民をエジプトから導き出すようにとの使命を与えられる、重要な箇所です。また、神の存在を語る箇所としても、しばしばその解釈が議論されてきたテキストでもあります。

この場面で、モーセは神に「名」を問います。神はモーセに出エジプト記3:14で「エヘイエ・アシェル・エヘイエ」と答えました。これは、最初の原典からの英訳聖書として引き合いに出される King James Version では I am that I am と訳されました。ほぼ直訳と申せます。上に書きましたヘブル語エヘイエは、動詞ハーヤーの一人称単数未完了形ですので、I am に近い。これは第三語でも繰り返されます。そして第二語は関係詞アシェルですので、that が当てはまります。そういうことで、I am that I am.

これは後の英訳にも影響を与えました。そして日本語に訳される際も、「我は有て在る者なり」（文語訳）、「わたしは、有って有る者」（口語訳）、「わたしはある。わたしはあるという者だ」（新共同訳）という具合に、英訳が基本的に踏襲されてきました。新共同訳の場合、関係詞アシェルを強調句と解したのだと思われます。ここから、神は存在の根源と説明されました。神は、原初から存在（ハーヤー）するところの存在（ハーヤー）なのだ、と。ヘブライズムから教会教父まで幅広く研究した有賀鐵太郎（1899-1977）は、ハーヤーという動詞に着目し、ギリシア思想の存在論（オントロギア）とはまったく異なるハヤトロギアとして、旧約的な神存在の問題の議論を試みました。

しかし、出エジプト記の文脈を丁寧に追うと、エヘイエは直前の3章12節で用いられています。それは、神からの使命委託に疑念を懐くモーセに向けられた、神からの約束を示す言葉です。

出エジプト記3:12「私はあなたと共にいる」（エヘイエ・イムマーク）

エヘイエ・イムマークは逐語的に訳すと「私はいる・あなたと共に」です。イムマークは「共に」を意味する前置詞「イム」に「あなた」を指す語尾が接続した形態です。そして出エジプト記でエヘイエが使われる箇所は、3章12節と14節以外では、隣接する4章12、15節のみですが、いずれも前置詞「イム」と併用されています。つまり、エヘイエは基本的に「イム」との併用を連想させる用語であると感じられます。

そこで、新翻訳で出エジプト記3章14節は「私はいる、という者である」と訳されています。当然のことながら、この「私はいる」は、「私は（あなたと共に）いる」を含意し

ます。聖書で証される神は、目の前のいすや机のような実在物と同じ形式で証明される方ではありません。わたしたちが向かい合う人と、受け入れ合い、尊敬し合い、互いに愛し合う中で、すなわち、「(神が) 共にいる」現実において出会うことの赦される方です。

コロンブスの卵を引き合いに出すのもはばかられますが、なぜこれまでの聖書翻訳が、このような素朴な文脈に気づかなかったのか、少々不思議な気もしました。これも、石川立先生のお言葉を拝借するならば、「聖書を耕す」恵みとして示された収穫であると思えます。

4. まとめに代えて

限られた時間ではありましたが、聖書翻訳の新しい取り組みについてお話ししてまいりました。わたしは口語訳の旧約聖書が出版された年に誕生しました。聖書といえば口語訳という気持ちで育ちました。ですので新共同訳が世に出た当初は、それになじめず、たいへん辛い思いもしました。しかし口語訳も念頭に、新共同訳を読み込み、聖書の豊かさを再発見し、いまでは最初に新共同訳のフレーズが思い浮かぶようになりました。これは讃美歌もそうです。最近、日本基督教団の新しい讃美歌である『讃美歌21』の20周年記念の会が行われたと聞きました。わたしは『讃美歌21』にもなじめなかったのですが、いまでは旧讃美歌と同じ旋律が流れますと、『讃美歌21』の歌詞が出てきます。

今回の聖書翻訳も、聖書に親しむ人の心を着実に耕し、信仰に新たな息吹を吹き入れてくれると信じております。もちろん、今回の翻訳も、いずれ新たな翻訳に取って代わられる暫定的なものという運命を免れるものではありません。わたしは学生の皆さんに、コヘレト書9:7「神はあなたの業をすでに受け入れてくださった」と9:10「手の及ぶことはどんなことでも力を尽くして行うがよい」を引いて、いま目の前にあることを一生懸命やるよう勧めています。この翻訳も、文字と辞書だけによって行ったものではありません。同時代を生きる人の顔を思い浮かべながら、ふさわしい訳語とメッセージを祈りながら導かれた業です。皆様にもこの翻訳に熱心に、力を尽くして向き合ってください、新たな発見を重ねていただきたく願うものです。神さまが、この土の器に豊かな宝を盛ってくださることを信じ、恵みを数える歩みを続けてまいりたく存じます。